春がくる前

小川未明

青空文庫

さびしい野原の中に一本の木立がありました。見渡すかぎり、あたりは、まだ一面に真っ白に雪が積もっていました。そして、寒い風が、葉の落ちつくしてしまった枝を吹くのよりほかに、聞こえるものもなかったのです。

木は、こうして毎日、長い寒い冬の間、さびしいのを我慢していました。それにつけても、過ぎ去った春、夏、秋の間のいろいろ楽しかったこと、おもしろかったことを思い出していたのであります。

その中でも、くびのまわりの赤い鳥が、枝に巣を造って、三羽の雛をかえして、三羽の雛が仲よく枝から枝へ飛びうつっていましたのを、木は忘れることができませんでした。

「いまごろは、あの親子の鳥はどこへいったろう。さだめし暖かな土地へいって、ああして、楽しくさえずったり、飛びまわったりしているであろう。そして、また、こちらが春になって暖かになったら、忘れずにやってくるかもしれない。そのときは、もう三羽とも雛鳥は、大きくなっていることだろう。」と、木は思いました。

こうして、木立は、毎日、風の音を聞いて、白い雲を見つめるよりほかになかったので、さびしく、退屈でなりませんでした。

「ああ、早く春がきてくれればいい。」と、独りで野原の中で脊伸びをして、あくびをしましても、だれもそばで聞いているものもなかったのです。

しかるに、ある日のこと、一羽の小さなうぐいすがどこからか飛んできて、この木のこずえに止まりました。

木は、さっそく、このうぐいすに話しかけたのであります。

「うぐいすさん、見れば、まだおまえさんはお若いが、この寒いのにどこへおゆきなさるのですか。そして、どこからおいでなさいました。」と、木立は、うぐいすに問うたのであります。

すると、年こそ幼いが、りこうそうなうぐいすは、木のいうことを頭を傾けて聞いていましたが、

「私は、あちらのふもとのやぶの中からやってきました。私は、お母さんといっしょに、そのやぶの中で暮らしました。いい香いのする花が咲いていました。また赤い実がなっていました。それは、いいところでした。私は、お母さんといっしょなら、けっしてよそへはゆきたいなどと思うことはありません。

けれど、平常お母さんは、私に向かって、町の方へいってはならない、おまえのようなよい子がいったら、きっと人間が捕まえて、かごの中に入れてしまうだろう。これまで、このやぶから出たもので、いくたり人間に捕まって帰ってこないものがあるかしれない。しかし人間は殺すのではない。かえって、うまいものを食べさせ、暖かにして、ときには水も浴びさせてくれて、大事にしてくれる。けれど、もう一生帰ってくることができないのだから、町の方へいってはならないといわれました。

私は、なんだか町を一度見たくてしかたがありません。たとえ、いくら見たくても、お母さんを残してゆく気は起こらなかったのです。

その私の大事な、そして、このうえなく私をかわいがってくださいましたお母さんが、この秋、病気で死んでしまわれたのです。私は、気が狂いそうでした。毎日、悲しくて泣きあかしました。そのうちに冬がきて雪が降りました。しかし、私は、長い間棲んだ、そのやぶを離れる気はしなかったのですが、このごろになって、せめ

ては、一度なりと町へいって、その景色をながめたり、また私どもの仲間の生活を見てきたいものだと思って、いま、旅立つ途中にあるのでございます。」と、若いうぐいすは、目に涙をためて答えました。

木は、しばらく、黙って聞いていましたが、

「おまえさんは、幼いけれど、なかなかしっかりしていなさる。それなら、町へいっても人間に捕らえられるようなことはあるまいから、見てきなさるがいい。いくらお友だちが、いい生活をしてもうらやみなさるな。帰りには、またきっと立ち寄ってください。」と、木はいいました。

「そんなら、いってきます。」といって、若いうぐいすは、灰色の空をあちらへと、町の方をさして姿を消してしまったのであります。

また、木は独りぼっちとなりました。

どこを見ても真っ白な雪が積もっていました。そして、絶えず寒い風が吹いて、身震いせずにはいられなかったのです。夜になると、星の光がものすごく頭の上を照らしました。

明くる日から、木は、幼いうぐいすのことが気にかかってなりませんでした。無事でいようか、人間に捕まりはしないかと、木は年をとっていましたので、いろいろのことが案じられてなりませんでした。

うぐいすは、町にいって、高い煙突を見ました。車のゆくのを見ました。火の見やぐらを見ました。いろいろなものを見ました。そして、垣根や、軒端に身を隠して、仲間のいる家をのぞきました。すると障子のはまった箱の中に入って、仲間がうたっていました。けれど、その箱はばかに狭く窮屈であったのです。なんだか、そのなき声に、聞き覚えがあったようでした。もう気が詰まるように感じて、そんなことをも考える余裕もなく、ふたたび野原の方を指して飛んできました。

「ただいま、帰りました。」といって、うぐいすは、木立に止まりました。

木は、うぐいすの帰ってきたのを喜んで、

「町は、どんなでした。」と聞きました。

うぐいすは、これに答えて、

「たとえ町の生活がどんなによくても、私はやはり、お母さんと暮らした、山の生活がいちばん好きです。」といいました。

うぐいすは、山のやぶへ帰るときに、一声いい音色を出してなきました。野原も、森も、木立はもちろんのこと、その音色に耳を傾けました。そして、彼らは、一時に長い眠りから呼びさまされたように、感心したのでありました。

二、三日すると、春が、この野原にも、木立にも、森にもやってきたのです。

――一九二〇・一二作――

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集　1」講談社
1976（昭和51）年11月10日第1刷
1977（昭和52）年C第3刷
初出：「まなびの友」
1921（大正10）年3月
※表題は底本では、「春《はる》がくる前《まえ》」となっています。
※初出時の表題は「春が来る前」です。
入力：特定非営利活動法人はるかぜ
校正：江村秀之
2013年9月8日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

春がくる前

小川未明

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/